

第64回

## 税に関する高校生の作文



カナダの税制と日本の将来

日本大学藤沢高等学校 1年

三澤百花

私の親友はカナダ人と日本人のハーフで、もう一人の友達は高校からカナダで暮らすことになりました。二人とも現地の生活をとても楽しんでいて、授業や町の雰囲気、文化の違いなどを生き生きと話してくれます。その話を聞くたびに、カナダの社会や暮らしに興味を持つようになりました。特にカナダでは税金の負担が比較的少なくとも、公共サービスがしっかり維持されていることに驚きました。

カナダは財政が安定している国の一で、連邦消費税であるGSTは一九八九年に導入され、当初七%でしたが、二〇〇八年には五%まで下げられました。税率が低くとも、医療や教育、インフラなどの公共サービスは十分に維持されており、財政運営の効率性と透明性が高いことが、税負担を軽くできる理由の一つです。

一方、日本の消費税は現在十%で、少子高齢化が進む中、医療や年金などの社会保障費が増加しているため、税率を簡単に下げるとは難しい状況です。しかし、カナダの例から学べることもあります。それは税金の高さだけでなく、税金がどのように使われ、どれだけ

効率的に財政が運営されているかが重要だという点です。国民が税金の使い道を理解し、納得して負担できることが、制度への信頼につながると思います。

これから日本が考えるべきことは、単に税率を調整することではなく、財政の透明性や効率性を高めることだと感じます。例えば、教育や医療、福祉に使われる税金の使い道を 국민に分かりやすく示し、無駄を減らす取り組みを強化することです。また、所得に応じた公平な負担の仕組みを整えることも大切です。カナダのように財政を健全化しつつ、国民の納得感を高めることが、将来の社会を持続可能にする鍵だと思います。

私の友達がカナダでの生活を楽しんでいる話を聞くと、税金が少なくて社会がしっかり回る仕組みがあることのメリットを実感します。日本も、国民が安心して暮らせる社会をつくるために、効率的で透明性の高い税制度を目指すべきだと思います。税は単なる負担ではなく、私たちの生活を支える重要な仕組みであり、将来の社会を考える上で欠かせないものだと感じます。



税と大阪万博から考える未来

日本大学藤沢高等学校 1年

江頭花菜

税金とは何だろうか。ニュースでは「税金の無駄づかい」や「増税への不満」が取り上げられ、税はなんとなくネガティブな印象をもたれがちだ。

しかしある日「二〇二五年大阪関西万博」の話題が出たとき、私はふと疑問に思った。「なぜこんなにお金をかけて万博をやるのだろう」と。インターネットで調べたところ万博の総事業費は数千億円もかかると分かった。そのうちの一部は国民の税金が使われているという。イベントが終わったらなくなるものに、そんなにお金をかけて良いのだろうか。そんな気持ちもよぎった。だが、もっと深く掘り下げるうちに大阪万博は単なる観光イベントではなく「未来社会の実験場」だということが見えてきた。例えば、会場内では脱炭素技術の活用や自動運転が使われている。これらは未来の暮らしの基盤になると思う。中でも私が注目したのは、「誰ひとり取り残さない」という理念である。大阪万博は発展した国の展示だけではなく、開発途上国との課題にも焦点を当てる。例えば安全な水を手に入れる技術や、安価で持続可能なエネルギー開発など人類全体の課題に向き合おうとしている。

それらを支えているのが私たちの税金であると考えると、そのお金に新たな意味が生まれてくる。税は単に「国が集めたお金」ではなく、「誰かの困難を解決するための力」でもあると思う。私たちはまだ納税の義務がない。けれど社会の一員として、「税がつくる社会」にすでに生きている。私はこの万博を通して「見えに税の意味」が少しずつ見えるようになってきた。教育も福祉も、未来への技術投資も、全ては人が人を支えるしくみとして税が土台にある。もっといえば税金は「信頼」で成り立っていると思う。自分の払ったお金が見えない誰かのために使われていることを信じる。その信頼こそが、社会をつなぐ見えない絆になるのだと私は感じる。大阪万博が終わった後、その会場には何が残るのか。もしかしたら建物ではなく、「未来を考える姿勢」や「見えないつながりの気づき」こそが本当の遺産になるかもしれない。

税金の使い道に疑問をもったことが、私にとっては「社会を見る目」を養うきっかけになった。これからの時代、ただ支えられる側ではなく、支える側として税の重みと可能性を自分なりに考え続けたいと思った。